

## 地域おこし協力隊 活動報告会を実施しました！

地域おこし協力隊とは、都市地域から地方へ移住し、地域おこしの支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る制度です。

そんな地域おこし協力隊が毎年実施している活動報告会ですが、今年は新型コロナウイルスの影響により動画配信サービス YouTube にて、あらかじめ収録していたものを配信という形で報告を実施しています。

下図の QR コード、もしくは動画配信サービス YouTube 内の「大分県豊後大野市地域おこし協力隊」チャンネル (<https://www.youtube.com/watch?v=5rUEsnYhgDo&t=146s>) より、ぜひご覧ください。



## ★ 春のお花が満開 ★

自然豊かな豊後大野市では  
今年の春も美しい花々が芽吹いています！



原尻の滝のチューリップ



大野町の芝桜



えぼし公園のボタン桜

## 作成者後記

豊後大野市地域おこし協力隊、移住定住促進担当の日淺（ひあさ）紗矢香と申します。当フリーペーパー、『ぶんご HOME』の第5号を手に取ってください、誠にありがとうございます！

今回は、豊後大野市で農業経営や野菜の代行販売、大工といった色々な「想いをつなぐ」方をご紹介しました。インタビューにご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

お話を伺った全ての方の、家族や地域に対する想いの強さや、未来へ向かって進むエネルギーの大きさ、その姿勢にとても感動しました。新型コロナウイルスをはじめとする大変な世の中ではありますが、豊後大野市で精一杯に頑張る多くの方々の姿を見て、非常に勇気づけられました。

私自身も地域おこし協力隊の任期が残り半年を過ぎました。業務の一貫として作成しているこのフリーペーパーも、7号まで作成を目指したいと思います。ぜひこれからも手に取って見ていただけますと幸いです。



ヘアアソブ ねばねばの後ろ姿…。

## ぶんご HOME vol.05

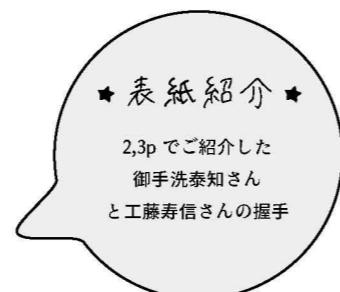
2021年4月発行

発行：豊後大野市役所まちづくり推進課 地域おこし協力隊

発行人：日淺紗矢香

問合先：豊後大野市役所まちづくり推進課

TEL / 0974-22-1001 FAX / 0974-22-3361



### ★ 表紙紹介 ★

2,3p でご紹介した  
御手洗泰知さん  
と工藤寿信さんの握手

豊後大野市の「人」と「暮らし」と「おうち」を考えるマガジン。

vol.05  
2021. Spring

Take Free

## ぶんご HOME



Bunjo Home

01

原木しいたけ栽培

×

想いをつなぐ

## 尊敬する 祖父と祖母の 想いと技術を 受け継ぎたい。

みたらい たいち  
御手洗 泰知さん

魅力あるしいたけ生産者をめざす 26 歳。



豊後大野市朝地町は、原木しいたけの産地として全国的に有名な地域のひとつ。ところが年々、しいたけ生産者の高齢化が進み、後継者も不足してきている。そんな現状の中、「祖父母のしいたけ栽培の技術を受け継ぎたい」と御手洗泰知さん（以下、泰知さん）は、実家の大分市から朝地町へ通いながら魅力あふれる原木しいたけの生産者になるべく修行に励んでいる。

大分市出身の泰知さんは、小さい頃から祖父母のもとへたびたび遊びに行っていた大好きなカブト虫を探したり土いじりをしたりと、朝地町の山で自然遊びの思い出がたくさんついた幼少期を過ごした。

地元の高校を卒業後、英語が好きで自由な生き方をしたいという思いがあり、宮崎県の国際系の大学へ進学。その後、教育関係会社への就職や留学斡旋会社への転職などを経て、2019年にはワーキングホリデーでオーストラリアへ行くも、新型コロナウイルスの影響により半年で帰国をすることに。

泰知さんが帰国を機に自身の今後を考えた時、思い浮かんだのは、小さい頃から触れてきた祖父母のしいたけ栽培だった。

「数年前に祖父が病で倒れたこともあって、しいたけ栽培のこれからを心配する思いがどこかにずっとあったんです。そして何より、祖父母が約50年ほど続けてきた歴史や想いを絶えさせたくない、未来へつなぎたいと強く思いました。」キラキラと希望で満ちた瞳で、泰知さんはそう意気込む。

祖父の病をきっかけに、すでに大分市から手伝いに来ていた叔父の慎治さんと共に、2020年春から本格的に原木しいたけの生産と勉強をスタート。また、しいたけ栽培のみでなく、景観の美しい山の中で友人と共に小屋づくりをしたり、カブトムシの幼虫を育てるミニハウスをつくったりと、大好きな自然遊びも欠かさない。

「最高の職場だと思っています。こんな素敵なか所にたくさんの若い人が集まり、農業に触れて興味を持ってもらう機会をつくっていきたいです。」

年々従事者が減っていく第一次産業に危機感を募らせながらも、その大きな可能性に希望を抱く泰知さんは、自然という大きな舞台に立ち、今日も原木しいたけに向き合う。



都市部から子どもや若者が

「通いやすい、寄りやすい」場づくりを。

「たいちゃんがしいたけやりたいって聞いてね、たまがって（驚いて）山を一つまっ平にしたよ。」そう満面の笑みで話す祖父の工藤寿信（ひさのぶ）さんは、農林水産大臣賞など数々の受賞歴のある原木しいたけづくりの名人。山の中で栽培してきた椎茸を整地した土地でのハウス栽培に切り替え、さらにハウスごとに天井の高さや管理方法を絶妙に変えるなど、これまで様々な工夫と挑戦を繰り返しながら質の高い原木しいたけを追求してきた。

「原木しいたけ栽培の伝統を守るためににはね、ずっと昔の方法のままじゃだめ。時代に応じて工夫して変化していくことが、しいたけを守っていくことになるんよ。」寿信さんが泰知さんのために山を切り崩してハウス栽培をしやすいよう整地した広々とした場所は、そんな寿信さんの愛情と挑戦心の大きさを表していた。

隣接する竹田市から21歳の時に朝地町へ嫁いできた祖母の正子さんは、寿信さんと共に約50年、しいたけ栽培に励んできた。「お父さん（寿信さん）は仕事に一生懸命な人なんやわ。」とにっこり一言。長年の絆と信頼を感じさせる。泰知さんと慎治さんの2人がチェンソーで玉切り（原木を適正な長さに切り分けること）の作業に励む様子を優しい眼差しで見つめては、「若い2人が来てくれて、嬉しいやら大変やらで。」とほほえみを浮かべ、玉切りされた原木をポンポンとたたいた。

若者がどんどん減り、高齢化が進む地域の中で、寿信さん、正子さんは大切に思っていることがある。「大分市だったり近くの都市部から、子どもや若者が『通いたい、寄りたい』と思う場づくりをしていきたいね。農業をやってみたい若手が挑戦できる地域だと良いよね。」

そんな柔軟な想いがきっと泰知さんたちを引き寄せたのだろう。

## 家族で団結し、変化と共に進んでいく。

泰知さんの叔父の慎治さんも、大分市で機械コンサルタントをしながらしいたけ栽培に励んでいる。

「父が3年前に病気になったことがきっかけで、しいたけ栽培を事業化することにしました。自然の中での仕事はストレスがないし、なんとかなる精神でやってますよ！」とさわやかな笑顔で話してくれた。

労力のみでなく、様々な工夫を重ねて質の良さを追求していく必要のあるしいたけの栽培を、家族みんなで団結しながら日々しいたけと向き合っている。そんな祖父母と叔父の背中を見ながら、原木しいたけの生産者として歩み始めた泰知さんは意欲に満ちていた。

「『誰が、どんな思いで、どんな風に栽培したのか』ということがしっかりと消費者に伝わるような農家になりたいと思っています。手間のかかる作業は多いですが、その手間がこだわりとなって、想いのつまった産物になると思っています。みんなで手間を惜しまず、時代に応じた形に変化させながらしいたけ栽培の伝統を守っていきたいです。」

家族で手間ひまかけて栽培し、想いを共有していく。祖父母の寿信さん、正子さんの歴史と想いは確実に若い世代へ引き継がれ、しっかりととした農家としての生き方や考え方にもつながっている。そんな団結力と変化という進化を大切にした姿勢が、今後も心のこもったこだわりの原木しいたけの生産につながっていくことは間違いないだろう。



02

野菜販売プロデュース  
×  
想いをつなぐ

## 農家、飲食店、消費者 それぞれの想いをカタチに。

鈴木薫さん(37)と三代めぐみさん(34)が運営する「Realize(リアライズ)」は、豊後大野市の珍しい野菜や市場では規格外品とされる野菜などを農家さんから直接仕入れ、都会の専門料理店などへつなげて「野菜を魅せる」料理へ変えている。農家さんは自分の作った農作物が「主役」として美しくお皿にディスプレイされ輝く姿に目を丸くし、安心安全で栄養価の高い野菜を求めるお客さんは喜んでお店へ食べに来る。Realizeの2人は、野菜を通じて生産者、飲食店、消費者それぞれの想いをつなげていた。

### Realize の目指すところ

01

新鮮な豊後大野市の農作物に関心があり、豊後大野市をPRしてくださる飲食店に適正な価格で提供する。(安売りはしない)

04

飲食店と共に、B品も消費できる仕組みをつくる。(フードロスをなくす)

02

野菜をオーダーメイドし、年間を通し、切れ間のない農作物の生産供給リレーを構築する。

05

カラフル野菜(珍しい野菜)が豊後大野市の特産品となり、地域が活性化する。

03

消費者、飲食店、生産者に利益が出る仕組みにする。



### 「生産者」の想いを自分の肌で知りたい。

Realize your feelings 「想いをカタチにする」。

農家、飲食店、消費者のそれぞれの想いをカタチにしたいと2020年1月に豊後大野市緒方町でRealizeが立ちあがった。

代表の鈴木薫さんは宮崎県出身。地元の商業高校を卒業後に縁のあった大分市で青果卸売会社に就職し、14年もの間、営業として北海道から鹿児島まで日本全国の農家さんを訪問して回った。様々な農作物や農家さんと触れていくうちに芽生えてきたのは「『生産側』の想いをより自分の肌で実感したい」という強い気持ち。

その気持ちちは冷めることなく、鈴木さんはついに一念発起して32歳でサラリーマン生活を辞め、一から農業について学ぶため複数の農家を回って学びながら生計を立てて4年間生活を送った。その中で出会ったのは豊かな土壤で育った質の高い豊後大野市の野菜たち。ユニークな野菜を育てる農家さんの個性にも強く惹かれ、「豊後大野市で野菜を作りPRしたい」と思うようになつた。

しかし豊後大野市の農家さんたちと接する中で気になることが出てきた。時折彼らから漏れる悩みの声だ。

「見た目はB品だけれど、味はA品と変わらない野菜をどうにか売ることができないか」、「消費者が求めている野菜が分かれれば、売れずに捨てる野菜を減らして喜ばれる野菜をたくさん作れるのに」。

こだわりの野菜を一生懸命に作っている農家さんはたくさんいる。自分の役割はその農家さんたちの困りごとを解決する方にあるのではないか。そう思った鈴木さんは、「生産側」から離れ、生産者の悩みを解決する仕組みづくりをしようと決意をした。

### 消費者、飲食店、生産者みなが喜ぶ仕組みを。

全国の農家さんのもとを渡り歩き、見る目を養った鈴木さんは、野菜のいろいろや品質を重視した専門料理店では、豊後大野市産の野菜が高く評価されると信じていた。そんな料理店へ、農家さんが愛情をこめて育てあげたこだわりの野菜を届けるにはどうすればよいのか、それに加えて消費者のニーズをいち早くキャッチし、農家さんがそれに応えられるにはどうしたらよいのか。

すべては良い野菜の発信と販路をつくることからだが、農家さんは自分が手をかけて育てたものをなかなか「これ美味しいですよ」と言いにくいという。第三者がPRし、代理で販売することでその野菜はより評価されやすいかもしれない。そう考えた鈴木さんは、それを叶える一步として「野菜代行販売」の仕組みを実現すべくRealizeをスタートさせた。

### 魅力を最大限に伸ばして伝える。

2020年の4月からRealizeにスタッフとして加わった三代めぐみさんは、持ち前の感性と視点から豊後大野市の野菜の魅力をPRしている。野菜を包むパッケージや、

商品に貼るシールなど、お客さんの目にとまるインパクトを大切にデザインや情報発信に努める。

また、三代さんは豊後大野市の珍しい野菜を入れると、必ず自身で調理をし、美味しい食べ方や組み合わせを研究している。そして月に一度、専門料理店の店頭で野菜の代行販売を実施する際には、そんなおすすめの調理方法と共にお客様へお届けすることを心がけている。

子どもの頃からダンスで活躍してきた三代さんは、「常にセンターを取ることを目指しています」と笑顔で話す。ダンスの世界同様に野菜も、その魅力を最大限に魅せる。個性的な珍しい野菜も、お客様の目にとまり美味しく食べてもらえるよう工夫を日々重ね、そんな「価値」あるものを値段を下げるのではなく魅せ方を伸ばすことで手に取る人が増えることを目指す。

### 命をつなげる仕事でみんなを笑顔に。

そんな2人は2020年11月から、緒方町のビニールハウスでベビーリーフ栽培をはじめた。十数年栽培していた人ができなくなり、想いを受け継いだ。まだまだ手探り中だというが、収穫体験などを通じて豊後大野市内外でも少しづつ認知度をあげてきている。「食育」を通じてたくさんの子どもたちに野菜を好きになってもらいたいと、ハウス内では子どもがはだしで走り回って遊べるようにわざと何も植えていないカフカな土が広がるスペースも作った。収穫体験に来た親子が「いつも家では野菜を食べないので今日はバクバク食べられたね!」と喜ぶ声を聞くと嬉しくなるという。

一方、都会では鈴木さんの予想通り豊後大野市産の野菜は高く評価された。東京都の渋谷駅前にある飲食店へ卸す青果店では、買い求める料理人が増えて「豊後大野市産コーナー」ができ、「豊後大野市産の野菜」表記のメニューができる料理店もあるという。

野菜がメニューの中に取り込まれると、三代さんはそれを食べに行き、農家さんへ写真を送って報告している。「自分たちの育てた野菜がこんな素敵な料理に変身するの?」と農家さんたちは驚いて家族と共に食べに足を運ぶという。また飲食店の方からも生産者に会うために豊後大野市へ訪れるというサイクルができる。お互いの環境を知り、信頼関係が構築されることで、お互いにより良いものを作ろうというモチベーションにつながるようだ。また、そんな姿がRealizeの2人にとっても大きな喜びになっていることは間違いない。

「野菜という命をつなげる仕事。美味しい野菜を育てる人、調理する人、食べる人それぞれの想いをカタチにする仕事。そんな仕事をこれからもやっていきたいです。みんなが笑顔になつたら幸せですよね。」

農家、飲食店、消費者の想い、それはすべてRealizeの想いもある。その想いをカタチにしていく2人の活動はまだまだ始まったばかりだ。

# たくさんの人人が幸せになる家づくりを、 この地域で。

- 合澤さんが大工になろうと思ったきっかけを教えてください。

4歳の頃、実家の農機具倉庫をつくっている大工さんの姿を見て、「かっこいい！」と思ったことが一番最初のきっかけでした。屋根の上で汗を流しながら作業する背中がとても輝いて見えたんです。「いつの日か生まれ育った地域で一人前の大工になりたい」と強い憧れを抱いたまま、小学校、中学校、高校と過ごし、その夢を叶えるべく大工技能の学べる大阪の専門学校へ進学をしました。



- 大工を目指す女性は当時珍しかったのではないですか？

実際、専門学校でもクラスで女性は自分一人だけでした。でも、特に気になったこともありませんし、「女性だから」という意識はありませんでした。クラスメイトと共に多くの知識や技術を学び、身に着けていく時間はとても有意義でした。

- 専門学校を卒業後、地元の豊後大野市で大工になるまでの経緯を教えてください。

大工の技能を専門学校で学んだ後、ご縁のあった滋賀県の工務店で3年間修行しました。その工務店では伝統工法について学びながら技術を身に着けることができました。学校ではどうしても知識がメインになりますが、実際に現場で場数を踏むことが大切だと改めて実感し、実りの多い時間を過ごしました。

もともと「地元で大工になりたい」という夢を抱いていたので、滋賀県の工務店で3年間働いたのち、豊後大野市へ戻り、一人親方として「夕木建築」を立ち上げました。

ただ当時、大工の知識と経験はあっても経営については右も左も分からず状態でしたので、どうやって勉強していくかと考えていました。そんな時に、父が友人の「えいさん」（衛藤信市さん）を紹介してくれたんです。えいさんは「衛藤建築」を経営しながら一級技能士として大工をしています。そして何より地域からの信頼が厚くて、常に仕事の依頼が途切れることなく、周囲からも「衛藤親方につけば大丈夫」と後押しされました。これから経営と大工を両立できるよう、えいさんの元で修業をさらに重ねて成長していきたいと思っています。

- Uターンで帰ってきた豊後大野市での暮らしはいかがですか。

とても住み良いなあと思います。地域の人たちはみんな面白くて優しいし、やはり地元は居心地が良いです。家族仲も良いので、一緒に色々な所へ行ったりと楽しく過ごしています。地元で大工になるという夢を叶えることができたので、仕事が落ち着いたら実家の改修もやりたいと思っています。

- 大工兼経営者としての今後の夢を教えてください。

えいさんのように、一人で経営も大工もできる地域の人から直接仕事を頼んでもらえるような大工になりたいです。お客様の要望にもしっかりと応えられるようになりたいですし、何よりもえいさんを越えたいです！

そして豊後大野市にはずっと住みたいですし、大好きなこの地域で、みんなが住みたくなる、幸せな気持ちになる家をたくさんつくっていきたいです。

地元で小さい頃からの夢を叶えた女性の大工さんがいるー

そう聞きつけ、向かったのは作業先の現場。そこにはまさしく大工として輝く合澤夕貴さんと、合澤さんの「師匠」、衛藤信市さんの姿があった。お互いに「えいさん」、「ゆうちゃん」と呼び合う親子のような2人。その絆と大工に対する想い、描く未来とは。

- 衛藤親方の大工歴について教えてください。

私は18歳の時に大工になって、32歳のときに「衛藤建築」を経営し始めました。新築、増改築、リフォームを中心に、地域の建築物に携わってもう44年が経ちました。

- 合澤さんの弟子入りについて最初どう思われましたか。

初めて会った時、サバサバはきはきしていて、それでいて素直で可愛らしい子だと思いました。ただ最初は、「一体、どれくらいのやる気と技術があるんだろう」と試していた部分がありましたね。

- 実際に一緒に働いてみて、いかがですか？

大工の基本はもちろん、しっかりと技術があって丁寧かつスピードの速い仕事ぶりに驚きました。重たいものも難なく持つし、大工として、問題なく出来上がっていると思いました。ただこれから一人で経営をしていくにはやっぱり経験が足りていないので、そこは自分の背中を見て成長してほしいという思いがありました。

- 衛藤さんの思う合澤さんの強みを教えてください。

「ゆうちゃん」（合澤夕貴さん）はイラストを描くのが得意で、お客様の希望の内装などを聞く際に、その場でイラストを描きながらお客様のイメージと一緒に形にしていきます。また、新築を建てる時には、特に女性のお客さんとの話がよく弾んで、お客様のニーズをしっかりと把握してからセンスの良い内装を提案できるんですよ。

また、そんなイラストを使いながらSNSやネットでの発信を頑張ってくれていますね。私にはできない事なので、すごいなあと思って見ていますよ。



お客様の要望をその場でイラストにし（上）、イメージを共有してから制作する（下）

- これから合澤さんにどんな大工兼経営者になってほしいですか。

どんどんと人が減り活力がなくなる地域ですが、これからも地域に残って、周りからの信頼を得て大工も経営もできる人になってほしいですね。

そしてたくさんの「良い家」をつくり続けてほしいです。自分を越えてはほしいと思っているけれど…越えられないんじゃないかな？（笑）越えられないようにしていきますよ。

